



夕霧書齋
文章卷之
四遠州人
光卯作尾
陽人北堂
画

1717

第



~ 13
3040
4



門 へ 15
3040
巻 4

夕霧書齋文章卷之四

遠州小夜中山林兼 栗杖亭鬼卯著

夕霧 伊左身の上と後里揚詰の話

かくて伊左身の上と後里揚詰の話

夕霧の二とせ三年の恨胸の偏り唯何へるくまの針

よ休沈む後針は歌うは一夜奥成光一の何事と久

多清鶴のけの松山の脊状撫や夕霧何事ぞたし

んと静よとさまぐみ抱もるよ伊左身の上と静よ

藤と静よるけ夕霧といふの某おとく内統をまでせし

女よりいふ静よてかく君傾城と身と沈沈を我も此女

夕霧書齋之四

昭和九年
七月三日
贈求

此は程の病者久き湯屋に對し私うき次者なり
花の井某大和より都へ出さまぐ約清と昂しは姫備も
伊豆の國へ下りしとせむかさと落し今ハ身のいふきと
るりより志し無事の對面へ候しこれどもが於安小成
る事いと不審中も此は夢まねしとるこれに口へ出だ給方さけき
弥恨糸胸より偏りまゝんとしこれに口へ出だ給方さけき
懐より封せしおとれ出し候なりよとことお付又さ先
ぐと泣沈るる候なり不審晴まおくりよして是
花の井との候なりとけり用さんまは是といそのいと
慰しする候屋久き湯といふ人の妹を早あまはいうで

そのいづき家の侍の娘と女房よとくき妹よと切の
令或百両無んとい事可案やそのいづきよとくき
重ては久ぬも無用なりとの久新るれは伊夫と結く
んるよと代清ハゲもぬるれは初て母昔既の不意さら
んと修りるこいばやよと書けはなとやとんて嘆く其体
贈しと思らん全母昔既の云合せての事ならん是を
我大和よりけりるるぬまの申は涼八束りしならん家の
大和より系へ出さまぐ約清と昂しは姫備も
もつたらよ修りるれは夕霧少の疑も晴たさふそ
修りるまどいづきとけり君の系よまがひは候なり



妙雨



伊左工門
勘當を受
回

手代清八

伊左工門

番八忠右工門

打ちあいていうよも終似しんども是へて代清八といふ
 者の多致るり家と一緒に入本たふ新家も許す
 分遠いれと評判の男も是へ母畜以是よ書世に疑
 ろう去りも悟きの畜以忠たろめり疑をそ振之
 家よい海く隠し優或百両計の事よかり於孝人の者
 と君傾城よ賣せし事るべきも母畜以を恨め
 一これ色より家揚借よして外の客へ出入づくらん気
 よて恨と晴めるといふよ文房も中りり疑いよ自ら
 八松久松其外牽以未社も初てそ狐世に扱く不
 思議の事よて一度も志めり中りんをよ自出度改て

伊祝云の登し後と皆く浮立酒園よ乃い各醉よ
 糸よまより園中よ入く二とせとせのうさつらさ紙
 物修り多れよそまりまくれ
 源八角力えく雷電と名系養屋仔たろ
 居續して放蕩よか括
 却院源八の花の井坊扇屋一後八十流吉平方来り
 礼謝さるよ吉平いらく下今よりい主人もは老
 母幼き見代養ふたつきよ困りぬは「是より角力を
 ぬ多し」其うち中りりも母信りてさん去り於時八年
 孫念一通い主人中納を殿の妾居も常よ歩めり日遊

て圓光の如く一さの耐よいた金の後多と云ふ
 五つむらじ家初と陸ひまといふ源八も下地好の流
 るれはいちやうにも貴く法中教するるといへば八十倍は角
 力年壽と云ひきて源八とんせお僕の上雷電と云
 系と付角力中間へ入るれも男がう能か飽まで強其
 上付ての子業るまは氣出しうそ初は入雷電源八
 と呼ぶ見負強き角力よまけ度の勢進角力の雷電
 一人ありと浪花中の評判うく流りくる今度の太閤ハ
 丸山三上山園脇八十倍源氏山とぞあり多れまうれよ
 九州の楠定とて六尺有餘の男又日の同去と付へ六日圓よ

楠定雷電との多終成が物の足事よ雷電楠定と扱れは
 見物大い勝と漢一扱く雷電かま多う哉と称入るれ
 七月圓よ三上山百考八十倍去年との多終成がその日
 八十倍がう怪象けりるれは角力明日一扱くりんと約可
 びりうくれは見物一同よ雷電と出せと云くう呼りるよぞ
 年壽どもも今年初ての雷電教年圓五の三上山よい合
 まいといふよ雷電を治て私中うく海年初出の角力
 三上山園五よ負るい知見し事うまは知れもおせは一番
 きてんたうし新くれば八十倍も大い勝ひ其方其んまら
 へ負て取らうらば捕ても扱ありまし家くても客日あり

之上山より騰びしとも思ひこぼるるに
 して物もぬれしをて之上山雷電と
 知らせし声も入る
 以て小侍見物一河より雷電
 出よとてよりきり
 之上山より雷電と小見の
 思ひなれば今始て
 出某杯よと云ふ
 即裁骨と折
 きては儀(上らぬ中)うて
 是んと断るつて
 上りたる雷電は
 静も遠と終らつて
 居る事と
 之上山の吼ゆり
 どもききとせし
 声もつて人跡
 せん
 と加うれと雷電は
 右(左)へ
 飛ちて
 廻り容易よ
 矢付せよ
 之上山
 大よ怒り
 無二
 無三

絶付不脱腕と
 死ては儀の
 志平(お付
 くる)の目
 尻より
 雷電と
 矢の
 花と
 笑ひ
 雷と
 進んで
 入る
 之上山
 何程の
 事(うら
 ん)と
 纏りし
 上儀の
 志平(お
 付)は
 面固と
 笑ひし
 雷電と
 懐か
 しく
 なる
 まより
 雷電が
 評判
 時
 書き
 関
 糸
 の
 拾
 合
 へ
 成
 け
 色
 へ
 ぬ
 り
 懐
 け
 せ
 け
 成
 録
 念
 (お
 付)は
 中
 納
 を
 敬
 り
 人
 志
 平
 の
 進
 及
 ち
 目
 よ
 かり
 大
 坂
 の
 始
 末
 ち
 物
 終
 り
 中
 納
 へ
 余
 の
 角
 力
 と
 侍
 ち
 かく
 て
 後
 存
 存
 ち
 あり
 花
 の
 井
 面
 舎
 して
 其
 月
 より
 宿
 へ
 帰
 ら
 ば
 居
 候
 へ
 ば
 くれ
 ば

母書既大不覺おぼしもさまぐいふ途の人い成つきくもいれぬのい恨み
けさの馬うま平ひら風のかぜてを更さら入いりて母はのい恨みをいふを
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
途みちにいては母はのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み

誓ちか塚づか荒あ入い郎らう文ぶん房ぼうよを想おもひを結むす

室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み
室むろのい恨みをいふを更さら入いりて母はのい恨み

立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを
立た浪なみ花はな津つへで養やしやう生せいとして送返かへ抱かかへの角かく力りきをいふを



とも歩入ざれば後方より紙子一夜とけり又勤高とぞ
 一しりりる伊左の初て着の笑ふる心るまじくも夕霧と
 花の井といふ事とまじくかた身持小紙たるも余く母
 妻の心よりと却て兩人と恨と物ともいまで出ゆり
 まより何國と高とふりまじくも一紙の扇登りあるよ
 も紙子の身の上の紙とれば面紙くく彫りて夕霧
 よ安否志うくれ事と物信まじく夕霧のけりるよも何とま
 じく是旨まらるが罪するいづせんと思案世しがたけり
 身よりりるいにて中く曲論よても奇付やまじく一先
 系部之源八がむ母の方へ行て憂と凌さぬ入家子仔

左即もら女子四つふるりぬまはせとんの樂一まじく
 義とる一紙の源八諸も往思案もけりるよの今も
 流と流一某はそらとんのと娘一まじく月日を送り
 義と系部の流の方言信よ世に今更のけりるよ
 いて世信よかつとて申すを別ひのむら妻よはまじく
 も娘令死をいして流と母信よるまじく切られけり
 又思案して系部よおはまじくおはまじく思ひて
 かく中よりまじく伊左の國熱流よ中納言殿娘を
 父と系よ進殿今の中配和のてくへるまじくゆらまじく
 のまじくぬまじくおはまじくおはまじくおはまじく

の心も人よの事さるるに依りてもく勤尚は
 のよなきこといふは伊豆もゆへにして太系を教中も僅
 或百兩計の事して似状と云ふるに
 かく傾城より下りたるも皆家督さるるに
 いかされ終も母書限が不意して
 之従るるに伊豆下らんか
 後登母在るが所とんとて後指さるるに
 松山と教く勤尚の信とせん
 松山と信よむせむきのよ
 信のよ久き清夜と偏よ教く
 松山と信よむせむきのよ
 信のよ久き清夜と偏よ教く

一々も思ふらんまうの事へ家付流居るよ
 うれぬ勤尚ゆりるまが
 の事へ久き清夜と偏よ教く
 うれぬ勤尚ゆりるまが
 の事へ久き清夜と偏よ教く
 うれぬ勤尚ゆりるまが
 の事へ久き清夜と偏よ教く
 うれぬ勤尚ゆりるまが
 の事へ久き清夜と偏よ教く

中と暮るうりうり次舟より松山の扇屋の真上に向い
 目形も水船の多勢が身の上存なら候今此勘定の方
 派のいても無程の島高もゆく候らんまこと夕勢外の人
 枕と云ふやての婦女郎の松山存なら候一之中さん何ぞ
 ままぞ存お計動る中より一より下されゆく候れば扇屋
 の真上もお無さういふも是もて存なら候式万兩計き
 ひのう大勘定勘定の方とありゆくも程なく島高
 もゆりせん是も夕勢方働きの事なるまじら
 外の存も人々も違つては気候よく勤よく揚屋へや夕
 勢へ存お計と解られは各々不審して候城の存お計

と仕地の蜀北はえとつるへりし物いぐる男自慢の音
 へ已存お計と云ふも度と重くひてゆるべ何の方より帯
 と結せて見せんと却て夕勢くともるころころよ
 までついで流りくる
 源八長崎へ角力より存お母浪那小見と連て
 浪花へ存お結
 かくてふな色の老母の花の井より流りし山見と大切より
 分れへ折じ夕勢より金子と登せふ自中より存お世よ
 存お勘定より存お父さん存お母さん存お方の上いで存お
 存おまうんご付らるのころ存おはかしくよ存お候えせん

源八もい程長崎へ角かよひつゝ久しく家裏へ其上
 去年より眼病と称い終つて両眼志いさむかしく又つよ
 ろる伴を郎と社柱と頼む書せし伴を郎頼りよ父母と
 葉少い浪花一筋たりと歎くは今の系統よりつても一筋
 と助く人をもろれば僅の家と賣代はしゆしの銀子と
 懐くして伴を郎とて成列を浪花付きて歩ゆれば
 夕霧と見んへ金堂のたま職よと食の境が見ゆれば
 勤の和る人とを乞ひの得るを後生の申うるとやび伴を郎と
 勤高更の来志とば物傳とて今ハカと落し見ん方
 ろるれば長町辺の乞食者よりつて日く候より天王寺の

の人立多きおへゆておとまると養育士の書付と伴
 を郎は旦那様一様下されしと付歩ゆ一様二様と笑ひを
 目成送りつゝを不便るは却後阿波大臣農六郎へ伴
 志よ傾城と賞まけの情思ひし伴を郎勤高更とて
 来志を候とておとまると候い夕霧とよ入る時節到来
 と其日より揚借よはしれども是れお計の夕霧一様も
 念へ入るりこれ阿波大臣は終つしつゝもい通計と
 金銀権威つゝも伴を郎へさむぐ伺ててと書せしも
 夕霧の返書とせむと只つてと伴を郎が事のお思ひ
 書しつゝおとまるとも日く奉候より新町よ来り



くらがぬくまは板の物思ひさき身付つよても酒の興も
 荒果るるり明日の天王寺より生玉の振返り君のん
 と懸念のつづねるるらんらんらん一筆の香同前の夕霧
 の邊へ出るわいの憂と憂く事もわろろんと天王寺系
 循の事と阿波大臣よれくふたよ懐ひ乞ひ一與るらん
 天王寺より浮瀬の振ひ百く憂宣しく汁うぶと管
 懐ひ勇まの厨抱をと持せ引船先諸も天王寺へこ
 そめふてくれ

夕霧侍を郎と見れ之上山老姥と殺と語

かくて夕霧の阿波大盡よ偽られ事既よへ之上山百く憂

毛纏と打ちげらうとと拂へ夕霧が殺を之上山が大男よ
 物見成さ市中群集とほして附歩ゆら合那が辻より天
 王寺へ詣まより清水浮瀬よ来り幾代君がよめの大女
 よて春うけ浮瀬よとて阿波大盡之上山諸も大女
 打して打併くまへ夕霧の引船先と打連吉原の小門より
 橋邊坂の方を釋よ見ゆるよ新よ書付と書く職くら
 ぬ老婢の盲人六ツ針のよ紙傍よ書き役還の人よ二錢
 ととよまよ夕霧の思ひ引船よ船屋と書かせ下と
 きて結ひ足まの源八が母ろりこへいと側する書付と
 見るよ主人初と養ふたつきとらり扱ひ二支の附列せし

侍を郎よやくとカキまはるる程侍をよと生寫しする悲さ
 やる方よりいつて盲人といへるやかくまで落し進しと向
 んとまゝのよ列船免と船といはらうよ皆れをなと幽て
 お姥どのい下り盲人といへる其よへそらこの孫よと志
 きぬふりよはゆれは盲婆を釈してとらうと振ふねせ終
 とやはしくも成易下さるる来る長いき物修るるまで
 も山歩下されは姥が主人の娘にけよとぬ家よ新けよと賣
 ると君(忠義)とてその其後もお爺はん附とほのめけしう去
 年よりハ喜伝もほし一人の侍も有るくても長崎へ来り
 便もほし其内よ婆へ眼とねの底眺とらふりのよと終よ

盲人といへるや却てけ子のぬ抱よ新りる氣子備る具衣
 類もさう賣代はし烟のきとせし小け子頻よ浪死
 一終しと泣のふよすりけ子の両親へ出地よつさへたら
 孫をさるもつらんと愛元へりり父にと余不らから君
 きいお高のよひて終果志とばとま火か成落しと波
 るたつさきも盲人といへるまはせんまゝとくやれ街よおまゝ
 此の情状を文はらとつより女事へ胸をさうり涙泉の如く
 湧出る紙押静免れもなと歯ち又取しそ終果志とば
 ともや留るわよ母にけりしと志くばまどと君のぬ老婆は
 おまゝいまいけ子も明言急暴いの人どもいぬ袋換を今

浪花の隠るきたま藏よりうらむべも食膳が召給ふの
 此身の秘とらんまの秘を秘しか中りの姿もなても今までの
 召不しつゝの夜毎は夕霧の身もさもつゝきば袖と益
 石もつゝおちる心地して人目につくば家も抱えて名も
 んりのと清と吾の若くは縮と吾も増りたる侍を
 郎は夕霧とつゝと見ては叔母様は何して泣く泣
 ぐも一様下されすと袖もさぐれはんまき引船走も
 も名代僅一髪とつゝの心そ哀れの酒も受より右
 支拂いも深瀬少く吾座中さん出せぬと引立
 せは夕霧のハつるよりつゝまびつゝせんともくよんと碎

ふはれ代静の懐中よりを歩十に又出し服中よ色も
 く初き人今懐くつゝの味は侍は侍と信しつゝ
 つゝと進むるる色もそ次しき衣袋もそも振(笑)之
 とるもせば侍を郎押戴き開き見んてけ美をさるる小
 物へ何うやらん只清と下されよつゝよ老波の揚り寄き分
 とよよと老太は誇りきかた大金と下さるるいふ水方そや
 流るるや金とつゝのふりのあつね子るれは色より清とよ
 くも食よりつゝのふりのあつね子るれは色より清とよ
 思ひもつゝの泣出せしき老婦人付け水方いつゝま子
 細らるる名と名系下されよと揚り寄きたる

の懐めやと懐くもやりの押こらしさたく浮ぬ(ぬ)越くと
 無程よ引え約くる阿波大曲の夕暮が見ざるは方ぐと
 一よ乞食の物倍ると子細うんととと母ぶよ之上山も同
 じくありてよよの唄合何ひ居るるは入さぬを歩と中り
 とも得く凡そく三上山の唄うたへきて夕霧伴を種
 と中(中)とせ(せ)の美茶よりの待合くと食の俸(俸)を伴うら
 種(種)の山俸(山俸)のおま(おま)つるま(ま)づ 汝(汝)の小児(小児)と奪(奪)ひて(て)あ(あ)ら(ら)じ
 こ中(中)とま(ま)さん(さん)いて(いて)家(家)ん(ん)に(に)降(降)り(り)や(や)し(し)の(の)う(う)る(る)べ(べ)從(從)令(令)鬼(鬼)の
 ぶ(ぶ)き(き)女(女)る(る)り(り)も(も)子(子)の(の)思(思)よ(よ)引(引)き(き)て(て)い(い)る(る)む(む)事(事)る(る)は(は)屈(屈)竟(竟)
 の人(人)竹(竹)貫(貫)ぬ(ぬ)がん(がん)る(る)れ(れ)不(不)仕(仕)換(換)む(む)る(る)事(事)る(る)ま(ま)と(と)合(合)り(り)其(其)分(分)の

何喰いぬ魚(魚)少く浮ぬ(ぬ)又酒(酒)とそ初(初)り(り)う(う)た(た)三(三)上(上)山(山)百(百)を
 へ(へ)ま(ま)何(何)い(い)中(中)り(り)と(と)ら(ら)る(る)よ(よ)智(智)徳(徳)山(山)見(見)よ(よ)向(向)い(い)く(く)思(思)ひ(ひ)さ(さ)る(る)結(結)
 撮(撮)る(る)令(令)紙(紙)美(美)い(い)く(く)も(も)お(お)ま(ま)へ(へ)異(異)振(振)登(登)り(り)て(て)快(快)き(き)小(小)袖(袖)と
 個(個)房(房)よ(よ)思(思)せ(せ)り(り)し(し)思(思)び(び)ぬ(ぬ)ま(ま)ふ(ふ)ぬ(ぬ)り(り)も(も)け(け)き(き)ハ(ハ)帰(帰)らん(らん)と
 着(着)と(と)巻(巻)て(て)お(お)く(く)げ(げ)合(合)那(那)が(が)け(け)の(の)く(く)一(一)存(存)在(在)即(即)よ(よ)身(身)引(引)き(き)と
 か(か)く(く)と(と)歩(歩)約(約)ゆ(ゆ)と(と)思(思)ぐ(ぐ)け(け)る(る)後(後)より(より)志(志)堅(堅)と(と)打(打)併(併)一(一)存(存)在(在)即
 と(と)小(小)腸(腸)よ(よ)う(う)い(い)ぬ(ぬ)け(け)か(か)ま(ま)ら(ら)老(老)波(波)の(の)貢(貢)つ(つ)る(る)よ(よ)三(三)上(上)山(山)か(か)は(は)ま(ま)
 付(付)何(何)者(者)る(る)れ(れ)ば(ば)狼(狼)藉(藉)た(た)と(と)け(け)身(身)は(は)げ(げ)ぐ(ぐ)よ(よ)成(成)し(し)も(も)其(其)
 子(子)い(い)涙(涙)ま(ま)ま(ま)と(と)む(む)ま(ま)ら(ら)付(付)と(と)面(面)倒(倒)る(る)老(老)ら(ら)と(と)片(片)足(足)と(と)揚(揚)
 て(て)脚(脚)腫(腫)と(と)下(下)と(と)蹴(蹴)る(る)よ(よ)大(大)力(力)の(の)男(男)よ(よ)志(志)く(く)り(り)洗(洗)ら(ら)し(し)事(事)さ(さ)む(む)ハ



きやうしん血成吐く即死し息の絶より侍を命置渡らん
 よしつらとて掛よて様書はしむと不づく事るれと侍と見廻
 ちよ一人もつらさむと天のつらと長町のつらけり
 老母の畑の中へ倒れ死さむとも食家なるれば非んも
 赤鼻引くけ産後一赤捨るるこそ無替るれ

阿波大直侍を所と素て夕霧と口況作

ひとともあはれ夕霧の阿波大直侍もかぞよ赤糸で新町へ
 帰るるが老母がまひ事之てよて侍を郎がぬかんで
 孫侍あまが身の上と素しん地区くればあまの命置一帰る
 くの翌月の中朝より吉田屋の近來りも無理も夕霧と連約

阿波大直侍の口況とすも地悪し申掛成さるる
 大直大の母の傾城の賣物あまの命置とて揚諾する
 じよゆは枕とるきん為るるもや勿論にき計との女郎
 の神云天をいふこそ例とすは今日其もん瓜極より孫
 枕とるきん其方もん瓜きては善せよと見以よ妻
 王乳とて妻てきふ夕霧赤糸の命置と結ら夕霧
 と瓜極の上はいふは枕とるきん為るるもや勿論にき計との女郎
 理るるも外の人と枕とるきん為るるもや勿論にき計との女郎
 も形るるも中々の水方よ一夜の枕成りては事るる
 夕霧方ゆくは風引るるも煙葉輪よ吹ては瓜極の

阿波大直跡^{あはのちかぢ}の汝^なは程^{ほど}に非^ひ面^{めん}らる^{らる}け方^{かた}よも計^{はかり}ら^ら有^あり
 文^{ふみ}く三^{さん}上^{じやう}山^{さん}云^い付^つ座^ざし^し毎^{まい}ろよ引^ひ出^でせ^せつ^つふ^ふより^{より}の^の申^{まを}度^た
 伴^{ばん}を^を命^{めい}と^とさ^さる^るも^も少^すし^しよ^よい^いま^ま免^{めん}百^{ひやく}と^とあ^あり^り引^ひ添^そえ^え出^でれ^れ
 大^{おほ}綱^なよ^よ沖^{おほ}入^い其^{その}下^{した}よ^よ老^{らう}大^{だい}と^と楯^{たて}と^と起^{おこ}し^し出^い出^でる^るを^をの^の方^{かた}
 目^めを^をら^らよ^よ位^ゐを^を存^{ぞん}する^るも^も作^{しや}天^{てん}ま^まれ^れど^ども^も家^けぞ^ぞ大^{だい}事^じと^と凡^{ぼん}向^{かう}
 も^も中^{ちゆう}に^にち^ちり^りく^くの^の伴^{ばん}を^を所^{しよ}へ^へ夕^{しゆ}秀^{しゆ}を^をん^んく^くま^まの^の山^{さん}金^{きん}と^と下^{した}さ^さ
 一^{ひと}叔^{しやく}母^ぼ核^{かく}其^{その}且^{かつ}那^な核^{かく}よ^よ定^{ぢやう}法^{ぽう}して^{して}も^も中^{ちゆう}に^に家^けと^と解^{かい}て^て笑^{わら}ふ^ふ
 下^{した}され^れる^るも^もく^く痛^{いた}い^いと^と悲^{かな}し^しく^く阿^あ波^は大^{だい}直^ぢを^をく^くと^と赤^{あか}點^{てん}と^と
 嗟^{あは}れ^れも^も痛^{いた}む^む一^{ひと}夕^{しゆ}秀^{しゆ}は^は小^{せう}悴^{さい}を^をち^ちや^やと^と尋^{たづ}ね^ねる^るよ^よ山^{さん}金^{きん}と^と
 て^て赤^{あか}直^ぢま^まの^の山^{さん}勝^{かつ}曼^{まん}坂^{ばん}よ^よち^ちり^りし^しを^を食^くの^の子^こよ^よ侍^{しやく}ら^らむ^むや^やい^いま^ま

其^{その}悴^{さい}る^るも^も其^{その}方^{かた}へ^へ何^{なに}の^の中^{ちゆう}縁^{えん}何^{なに}て^て多^{おほ}くの^の金^{きん}と^と悲^{かな}は^はせ^せや
 夕^{しゆ}秀^{しゆ}赤^{あか}直^ぢの^の阿^あ波^は大^{だい}直^ぢ核^{かく}と^とも^もい^いま^まも^も山^{さん}金^{きん}の^の方^{かた}の^の多^{おほ}く
 の^の今^{いま}山^{さん}中^{ちゆう}に^にし^しと^とお^おり^りし^しき^き作^{しや}事^じ哉^や中^{ちゆう}に^にも^も勤^{ちん}ま^まい^いと^とせ^せど
 も^も乞^こ願^{げん}よ^よく^くも^もつ^つる^る今^{いま}い^いつ^つよ^よて^ても^もち^ちり^りも^も行^やむ^むせ^せし^し阿^あ波^は大^{だい}
 直^ぢ赤^{あか}直^ぢも^も成^{じやう}程^{じやう}金^{きん}盛^{せい}の^の古^こま^ま藏^{ざう}る^るも^もい^いま^まも^も山^{さん}金^{きん}と^と悲^{かな}は^はせ^せし^しと^と
 其^{その}悴^{さい}い^いく^くも^もく^くよ^よ妻^{さい}と^とい^いる^るも^もて^ても^も不^ふ便^{べん}と^と思^{おも}は^はれ^れや^や夕^{しゆ}秀^{しゆ}
 む^むく^く色^{いろ}と^と悴^{さい}り^り後^ご令^{れい}伴^{ばん}を^を命^{めい}責^せ教^{きやう}さ^さる^るも^もも^も操^{そう}の^の背^{せい}く^く
 ま^まし^しと^と山^{さん}金^{きん}定^{ぢやう}め^めを^をい^いお^おり^りし^しき^き作^{しや}事^じら^らる^るも^も見^みの^の子^こと^と妻^{さい}に^に
 ま^まし^しと^と奴^ぬ家^け何^{なに}の^の方^{かた}よ^よ不^ふ便^{べん}と^と教^{きやう}れ^れん^ん阿^あ波^は大^{だい}直^ぢと^と怒^{いか}り
 鴉^あの^の伴^{ばん}と^と柄^{へい}物^{ぶつ}よ^よ交^かる^るも^もい^いま^まも^も伴^{ばん}を^を命^{めい}が^が天^{てん}家^けよ^よ流^{りゆう}し

かくまのらついついふと夕暮が方と志るまじと凡中うけ油染
 熱湯のこくぬきい命のちるまじとあくん成定めて
 某いぼいけ牌が今紙助ちんるまじと夕暮おあひを見
 の子の妻大教さういふ不便さうしてそりらとよぼんや可
 しき事とさふと酒と音とてらう多ねがんの内を便
 さ可毫さふ万各量の悲し成ほよまねば何れ
 阿波大船の熱湯と凡中今色とかくまじと小牌が今
 のちるまじ不便の事と云るさう一柄拍ざんぶとひまが
 侍を即い七慈八例して若くむさぬと山も縄と云るら
 今一柄拍うけるべ成よ今何のちるまじとあくん成定めて

と見上るよ夕暮のあふ熱湯浴るん成てん小思へは
 初き時より唯君と地をさ成信一昨日も妻病急地を信を
 後備一信ん片時も忘る事と云よかくる災難と命あよ見
 のふ成佛と恨め「まじ成佛の折えいつまうさうと地を
 善哉と恨む程もんの内さう侍を即あ死で母が苦痛と休
 めとくゆのん成成信」凡向もせ成居さうさる阿波大船
 とよ山も大よ不具一又一柄拍うけるべ成へ赤のてくさ
 虚空とつうと修よ業さう成さるんも夕暮へ見向を
 せざとけ今い成方さう死骸と打捨いさや大をさう一盤
 と台並さん百とちら成とと打速成成くく入る成と見

中へ夕霧の... や... なるまら... 懐るや... 死... 母... 恨... 思... 母... 死... 母... 恨... 思... 母... 死... 母... 恨... 思...

夕霧書智文章卷之四



